かも市史だより

令和５年３月
No.46

◆編集発行　加茂市幸町二丁目３番５号　加茂市教育委員会内市史編さん室　☎0256(52)0080 内線480

洋画家・栢森義の初期作品

右：《緑蔭》昭和 15 年 (1940)（個人所蔵）
左：《雪国の木工試験場》昭和 20 年 (1945) 頃
（加茂市所蔵）

《緑蔭》は南蒲原郡加茂町上条、現在の新町に生まれた洋画家・栢森義（一九〇一～九二）が昭和十五年（一九四〇）の紀元二千六百年奉祝美術展に出品した作品です。木蔭に憩う少年と二人の女性が描かれ、フランスの画家ポール・ゴーガンの影響を受けた初期の作風を伝えています。

従来、栢森の画業は、雪国の幻想を詩情豊かに描いた晩年の「雪女」シリーズを中心に語られてきました。栢森が少年時代を過ごした明治末～大正期には、上条を中心に織物業が活況を呈し、織物工場に働く女工たちへの憧れから、謎多き雪女のイメージが生まれたといいます。一方、《緑蔭》に至る昭和十年代前半の展覧会出品作にも、黒服に頭巾を被る労働者風の女性が登場するため、この頃から加茂の女工が作品の着想源となっていたようです。

しかし、太平洋戦争の開戦によって、栢森の創作活動は一変します。国民総力決戦美術展（昭和十八年）に兵士らの消火活動を描いた戦争画を出品、翌十九年には画家として活躍していた東京からの疎開を余儀なくされました。疎開中には、現在の県立加茂農林高校に隣接し、木製プロペラを製造した県立木工試験場の室内も作品に描いています。

栢森の筆がふたたび少年期の追想へと向かうのは、昭和四十年代、六十五歳を過ぎてのことでした。

（新潟県立近代美術館　長嶋圭哉）

戦時下の新潟県加茂高等女学校

新潟大学に所蔵されている『加茂高女校報』から垣間見える、戦時下の新潟県加茂高等女学校の生徒たちの動向の一端を紹介します。

百年前の大正十二年（一九二三）三月、現在の新潟県立加茂高校の前身となる新潟県南蒲原郡加茂町加茂実科高等女学校が文部省の設置認可を得て開校されました。同校ではその後、裁縫など家政に関する学科目に重きを置く実科高等女学校から中等普通教育を行う高等女学校への組織変更の準備が進められます。そして昭和三年（一九二八）四月、同校は、新潟県加茂高等女学校へと昇格しました。

新潟大学では、この新潟県加茂高等女学校で発行されていた『加茂高女校報』を、昭和十三年（一九三八）五月一日発行の五十号から昭和十七年（一九四二）三月発行の七十六号まで所蔵しています。昭和十二年七月にはじまった日中戦争以降、戦争が持続する中で、加茂高女の生徒たちが学校内外でどのような生活を送っていたかが垣間見える貴重な歴史資料です。なお発行紙の名称は、昭和十六年六月以降は『加茂高女学徒報国団報』と変更されています。

昭和十三年七月十八日付の五十一号では、同校が行った時局に対応する実践として、全校生徒による青海神社の神苑清掃の勤労奉仕、第三・四学年による応召遺家族のための放課後の衣服調製奉仕、山島新田で梨畑を営む応召遺家族のための梨の袋掛け奉仕作業などが紹介されています。また同年九月十日付の五十三号では、この作業に参加した生徒の作文が掲載されています。「昼飯に桃を皆が七つづゝもらつた。生生したのを洗つて皮のまゝがりがりやつた時はおいしかつた」という素朴な感想に続いて、「全部終つた時はいゝ気持ちだつた。いくらかでも人の為め、加茂の産業の為めに盡した事と、出征された方がどんなにかおよろこびになつたらうと思つたら疲れなんかどつかへ去つたやうだつた」と、時局の中での作業の意味を改めて確認する言葉が記されています。この梨の袋掛け作業は、『加茂高女校報』では昭和十六年まで続けられている

▶**勤労奉仕へ向かう女学生**　昭和十九年五月三十一日、校門前で撮影（三条市　広野富士夫氏所蔵）

ことが確認できます。

なお同じ五十三号には、この年五月に実施された修学旅行の感想文も掲載されています。この修学旅行は、表のように七泊八日で石川、滋賀、京都、大阪、奈良、三重、神奈川、東京をめぐる大掛かりな旅行でした。感想文では、京都で市電に乗っている際に、車窓から頭の上に花籠をあげて歩く女性を見つけ、「『あッ、大原女だ！』誰かが大きな声で叫ぶ。『それッ！』と皆が窓に首を出す」「『やア、いゝね！』『すてきだね！』などと、室の其処彼処に起る」と、感激する生徒たちの姿も活写されています。戦時下の『加茂高女校報』は、当時推進された地域での時局への対応に加え、それに覆いつくされない生徒たちの生活や感性をも伝えています。

（近現代部会　中村　元）

表 加茂高等学校修学旅行予定表

昭和13年5月

日付（発着時刻）	発着地	見学場所（宿泊場所）
5日 6:48発	加茂	
10:09着	直江津	
10:51発	直江津	
15:39着	金沢	兼六公園
23:04発	金沢	（車中）
6日 6:15着	大津	三井寺、比叡山、京都御所、嵐山、新京極（三条大橋東若葉旅館）
7日 13:23発	京都	桃山御陵、乃木神社、大仏、三十三間堂、豊国神社、清水寺、知恩院、インクライン、大極殿、北野神社、金閣寺、東本願寺
13:59着	大阪	大阪城、天王寺、千日前、道頓堀（道頓堀日本橋北詰讃岐屋旅館）
8日 9:03発	湊町	
10:10着	奈良	開化天皇陵、猿沢池、春日神社、万葉植物園、三笠山、東大寺大仏、南大門興福寺跡、南円堂、帝室博物館
15:15発	奈良	
19:28着	鳥羽	（鳥羽駅前　長門館）
9日 10:50発	鳥羽	鳥羽海岸、樋ノ山遊園地
11:01着	二見浦	海女ノ鮑取、徴古館、農業館、内宮、下宮
17:50発	山田	（車中）
10日 4:37着	藤沢	江ノ島、長谷ノ大仏、八幡宮、頼朝ノ墓、鎌倉宮
12:39発	大船	
13:35着	東京	宮城二重橋、朝日新聞社、東照宮、科学博物館、動物園、博物館、不忍池（東京市上野駅前 郡玉舎上野館）
11日 11:30発	上野	靖国神社、明治神宮、外苑絵画館、乃木神社、泉岳寺、三越、被服廠跡、浅草寺、浅草公園（車中）
12日 8:23着	加茂	解散

『加茂高女校報』50号（昭和13.5.1）より作成

縄文の丘に立つ新潟経営大学

～大学用地と川船河遺跡発掘調査～

新潟経営大学設立への公的支援は、前号で述べた県と県央ほか周辺自治体による、約三八億円にのぼる寄付金にとどまりませんでした。

大学予定地が加茂市希望ヶ丘と田上町川船河にまたがっていたため、用地のうち三〇四二六㎡を加茂市が、一四六〇一㎡を田上町が取得し、大学に無償譲渡しました。さらに、国道四〇三号線から大学への進入道路がなかったため、加茂市は事業費約八億五千万円をかけて「学校町都ヶ丘線」を整備、通学の便を図りました。

大学建設工事の着工を前に、越えなければならない大きなハードルがありました。建設予定地が、古くから知られる縄文時代晩期（約三〇〇〇～二〇〇〇年前）の遺跡「川船河遺跡」に隣接していたため、文化財保護法により事前の発掘調査が必要となったのです。

▲ 調査風景　発掘作業の向こうでは並行して造成工事が進む

道路建設や宅地造成などの開発行為にはつきものの発掘調査。遺跡上で工事を行う際には、事前に遺跡を掘り下げ、当時の人々の生きた痕跡を克明に調査・記録し、出土品を保存しなければなりません。

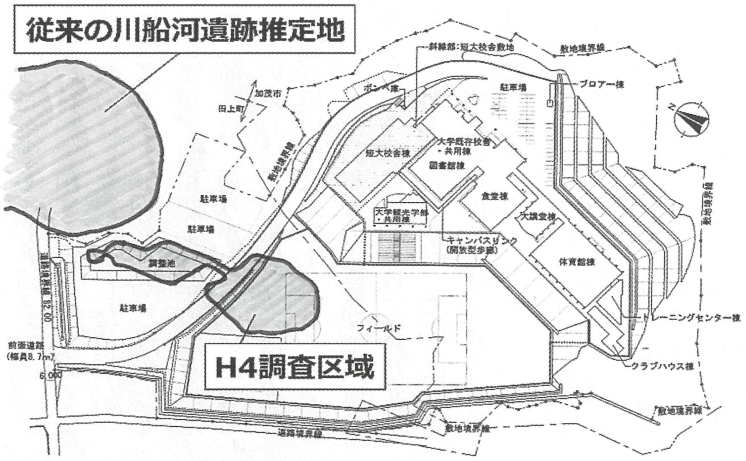
これにより工事が大幅に遅れるとともに、その経費も事業主体者が負担しなければならないことから、開発側としては極力避けたいものです。大学の設置母体である加茂暁星学園としても発掘調査を避けるため、県に登録された「埋蔵文化財包蔵地」の域外に、大学の用地を確保していました。

しかし、造成工事着工に係る県文化行政課との事前協議において、遺跡の範囲が不明確であること、また、工事中の遺跡の不時発見によって引き起こされる諸問題を考慮し、早急に大学予定地内での発掘調査を実施することになりました。

田上地内の遺跡ではありましたが、調査主体は田上町教育委員会と加茂市教育委員会が協力してこれにあたるという異例の体制。加茂・田上両市町は、これに先立って発掘調査を担当出来る専門職員を配置しました。約一六〇〇万円余りにのぼる調査費用は、調査の原因となった加茂暁星学園が負担しました。

調査期間は平成四年（一九九二）七月十三日から九月十七日。猛暑の中、炎天下での作業も続く、時季的にも日程的にも大変厳しい、過酷な調査となりました。加茂市シルバー人材センター二七名、ほか地元から四〇名という大勢の皆さんが、発掘作業とその後の出土品整理作業に従事しました。

総面積約四三〇〇㎡に及ぶ調査は、遅れれば大学の開学スケジュールにも支障を来たすという切羽詰まった状況で、関係者一同その推移を見守っていました。そうして、調査が終わったところから同時進行で建設工事を行うという、文字通りの突貫工事で何とか無事乗り切ることが出来ました。



▲遺跡位置図　学生たちは縄文の集落跡を通って校舎へと向かう

調査の結果、大学の敷地内から、我々の祖先が暮らした集落跡や建物の柱の跡など、六〇〇を超える生活の痕跡と、土器や石器など縄文時代後期から弥生時代後期に至る、多数の遺物が出土しました。それらの出土品は現在、田上町教育委員会で保管されています。

終わりに『川船河遺跡―新潟経営大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』（一九九六年 田上町教育委員会）より、当時の田上町教育委員会・佐藤幸雄教育長の序言を抜粋、引用させていただきます。

「…かつて考古学者や歴史学者が考えていた以上に発達していたといわれる縄文人の生活の舞台に、平成六年県央地域初の四年制大学が開学し、若い学生たちが遥かなる越後平野を望みながら新しい歴史を刻むことを思うとき、感無量なるものがあります…」。

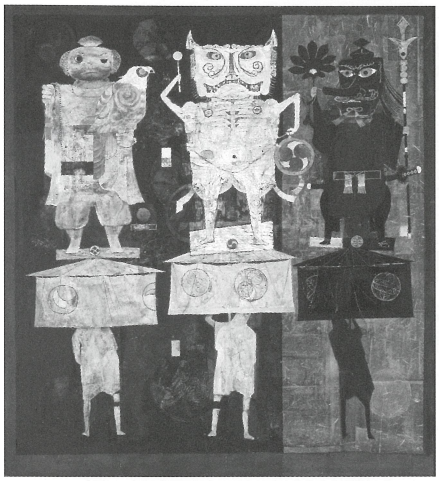
（近現代部会　齋藤　淳）

日本画家○橋本龍美と加茂祭

中央画壇で活躍した日本画家・橋本龍美（一九二八～二〇一六）は加茂町で生まれ育ちました。彼の作品は、少年時代の加茂町での生活体験を色濃く反映しています。その中から加茂祭を描いた作品を紹介します。

ふるさとを描いて世に出る

橋本龍美（本名誠吉）は、昭和三年に加茂町で生まれ、同三十六年に上京するまで同地で過ごしました。画家としての芽が出たのは昭和四十年、三十七歳の頃のことです。第二十九回新制作協会展日本画部で《祭鉾》と《夜噺》の二点が新作家賞を受賞。その翌年も春季展賞、新作家賞に加えて第七回現代日本美術展でコンクール賞を受賞、その後も日本画選抜展への招待出品、シェル美術賞展でも佳作賞を受賞し、昭和四十六年には新制作協会日本画部の会員に推挙されています。そして四十九年には日本画の中央画壇の一つである創画会の創立会員となり、第一線で活躍しました。



▲《祭鉾》1965年 第29回新制作展（第18回日本画部）新作家賞

龍美の作品の多くは加茂で過ごした少年時代の思い出がもとになっています。故郷を出る時は二度と帰るつもりのなかった龍美でしたが、その個性を際立たせたのは、他でもない故郷の思い出でした。故郷を描くようになって初めて、龍美の絵は注目されるようになったのです。

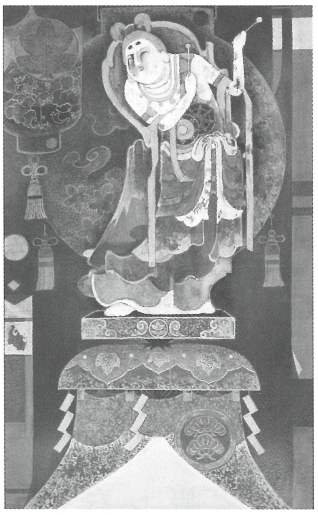
加茂祭の傘鉾行列

龍美の描く少年時代の原風景は、幼い頃に聞いた乳母の夜噺の世界から始まり、やがて加茂の人々の暮らしや子供の頃の遊びまで広がっていきますが、初期の主な画題の一つに「加茂祭」があります。加茂祭は、少年時代の龍美にとって特別な「ハレの日」だったのでしょう。猿田彦（天狗）を先頭としたメインの大行列（御神幸）、祭の日にやってくるサーカス、花火、そして怪しげな見世物小屋――その一つ一つが誠吉少年の心にくっきりと焼き付き、龍美の作品のモチーフとなりました。

祭の行列の中でも誠吉少年の心に残ったのは「傘鉾」でした。現在の加茂祭ではその数をぐっと減らしていますが、昭和四十四年の加茂川水害以前には、通りがいっぱいになるほどの夥しい数の傘鉾が加茂の通りを練り歩いたようです。

これだけの規模の傘鉾が加茂町の通りを行くのはかなり見応えがあったことと思われ、子どもたちはワクワクしてこの日のこの時を待ったに違いありません。

誠吉少年の目には、次から次へとやってくるそれぞれに趣向を凝らした鉾は、見飽きることのない絵巻物のように映ったことでしょう。初めて新作家賞を受賞した二点のうち《祭鉾》はもちろんこれを描いたものです。傘鉾を持つ人物はシルエットにとどめ、鉾のモチーフを強調して巨大に描いています。



▲《傘鉾（羽衣）》1999年 第25回春季創画展

黒と白によるコントラストや戯画化された表現も印象的です。その後も龍美は、晩年にいたるまで、出品作にも個展の小品にも、繰り返し傘鉾を描いています。

見世物芸人の悲哀

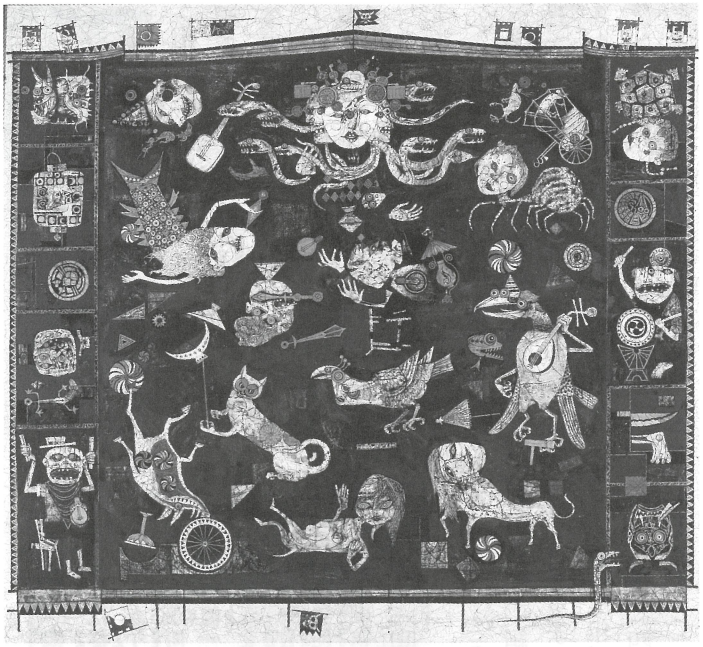
もう一つ、加茂祭にまつわるイベントで誠吉少年の心に残ったのが、今では殆ど見られなくなった「見世物小屋」です。昭和初期の当時は、祭といえば縁日とともに見世物小屋も付き物だったようです。見世物小屋とは、日常では見られない曲芸や天然奇物、細工などを期間限定で展示する小屋ですが、現代の感覚で言えば、子どもに見せるようなものではない猥雑なイメージがあります。

昭和四十一年の新制作展日本画部で二回目の新作家賞を受賞した《見世物》には、いわゆる人間火炎放射器や呑刀師、人魚のミイラなど、見世物小屋の出し物が所狭しと描かれています。画面の上中央にご本尊然として描かれているのは蛇娘――蛇を身体に巻き付けたり囓ったり、鼻か

ら入れて口から出したりしてみせる女性です。龍美は昭和五十年代に、この蛇娘をテーマに何点か作品を描いていますが、そこに描かれた蛇娘たちは、恐ろしさの奥にどこか悲哀を湛えており、誠吉少年は子供ながらに、運命に呑み込まれ、見世物芸人に身をやつして生きる人の悲しさを感じていたのかもしれません。

妖怪の「乳母祭」

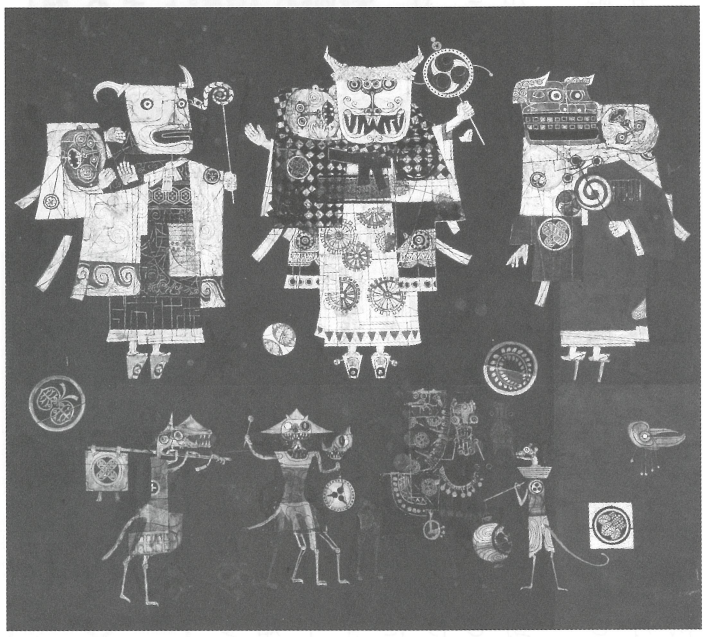
加茂祭は別名「乳母祭」として知られていますが、龍美は一点ではありますが、これも絵に描いています。現代日本美術展でコンクール賞を受賞した二点の内《よんよこ》がそれです。ここに描かれているのは、怖い顔の妖怪たちですが、よく見れば、三人はそれぞれ赤子をおぶっており、さらによく見れば、赤ん坊には豪華な産着が掛けられているのがわかります。妖怪たちは、手にでんでん太鼓や、それに似せたぐるぐる巻きの蛇で赤子をあやしています。従者は小動物たち。そう、龍美は妖怪の世界での乳母祭を描いているのです。



▲《見世物》1966年 第30回新制作展（第19回日本画部）新作家賞

サーカス

加茂祭の日のイベントとして最も華やかなものはサーカスだったでしょう。龍美の心にも特別な日の思い出としてずっと残っていたようです。残念ながらサーカスをメインテーマとして描いた作品はあまり残されていませんが、傘鉾のモチーフなどにはサーカスの風景が紛れ込んでおり、未完の絶筆にもサーカスの華やかな風景が描かれています。



▲《よんよこ》1966年 第7回現代日本美術展 コンクール賞

▲《祭之詩（蛇娘）》1977年 第4回山種美術館賞展

今回は、橋本龍美の「加茂祭」に関わる作品をご紹介しましたが、龍美は他にも、加茂の自然や人々の暮らしなど、その画業の殆どで加茂での原風景を描き続けました。

四月からは新潟県立近代美術館での回顧展も予定していますので、改めて加茂市が生んだ日本画家・橋本龍美を認識していただければ幸いです。

（新潟県立近代美術館　宮下東子）

▲《蛇姫》（未完／絶筆）

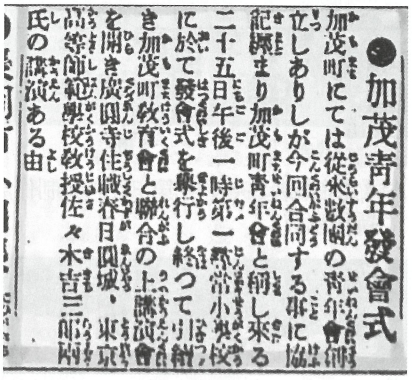
新潟県立近代美術館企画展「望郷の画家 橋本龍美展」令和五年四月十五日（土）～六月四日（日）

青年会の統合

明治四十三年（一九一〇）、南蒲原郡役所は、郡内の青年会を統括する南蒲原郡青年会を立ち上げました。もともとの青年会は、村や集落ごとの地縁的な組織でしたが、日露戦争などを契機に、国は市町村単位に統制を図るようになりました。ただ南蒲原郡の場合、大正五年（一九一六）の時点で、郡内五六町村のうち「統一的に改造せるもの僅かに十三」とされ、組織化は難航していた様子がうかがえます（『南蒲原郡是附調査書』）。

大正七年、加茂町では地域内の青年会が連合し、加茂町青年会として合同することになりました（『新潟新聞』大正7・8・22）。このときの会長が誰だったかはわかりませんが、大正十二年には市川辰雄が勤めています（『加茂町青年会会報』第二号）。市川辰雄は、大正十年から十四年まで加茂町長でした。

大正九年の統計では、南蒲原郡青年会へ参加した二一団体のうち、一四団体で首長が会長を勤めています（『新潟県史』通史編7）。加茂町でも町長が青年会長を兼務し、組織の浸透と強化を推し進めたと思われます。さらに、この時期の加茂町で青年の組織化が進む背景がもう一つありました。


●加茂青年發會式
加茂町にては從來數個の青年會組織
立しありしが今回合同する事に協
紀概まり加茂町青年會と稱し來る
二十五日午後一時第一尋常小學校
にて發會式を擧行し終つて引續
き加茂町教育會と聯合の上講演會
を開き廣國寺住職春日圓城、東京
高等師範學校教授佐々木吉三郎兩
氏の講演ある由

▲ 加茂町青年会の発会式（『新潟新聞』大正7・8・22）

大正十二年、加茂町は町内を第一区から第二四区に分け、行政区制を布きました。翌十三年に加茂町青年会が開いた陸上競技会では、第一区から第一四区の青年会が参加し、覇を競っています（『新潟新聞』大正13・6・18）。新聞が報じた一四という参加団体数は、二四の誤植だった可能性があります。

前年発足した行政区の区境は、特に住家の増えた町部では人工的な道路や水路で隔てていました。行政区の導入で、地縁的だった青年会の基盤は一部で再編されたことになります。こうして青年会は行政の下部組織に組み込まれ、規模の拡大と引き替えに独自色を薄められていきました。

（上条　加藤大輔）

毘沙門講と裸押し合い

仏法を守護する毘沙門天（多聞天）は、七福神の一としても知られています。古くからある講中の信仰を背景に、昭和三年（一九二八）に大昌寺（松坂町）、昭和七年に善興寺（下高柳）で相次いで毘沙門天を祀る毘沙門堂を建立しました。いずれも曹洞宗寺院で、その動機や祭祀は注目できます。

毘沙門講の呼び物は、裸押し合い祭りでした。大昌寺では三月三日の春季祭礼で裸押し合いを執行し、「近郷、近在よりの参詣人は堂外に溢れ、さすがの大伽藍もサンヨーサンヨーの押合にて揺るぐばかり」と賑やかな様子が紹介されています（『新潟新聞』昭和2・11・2）。大昌寺の毘沙門大祭は、中止された昭和二十年を除き戦後まで続きました（『加茂暁星学園六十年史』）。

善興寺毘沙門堂の本尊は、明治初年に廃絶した下高柳村の修験威徳院から引き継いで祀っています（『高柳毘沙門創立五十周年記念誌』）。大正～昭和初年頃の七谷村には、下高柳や宮寄上などの有志が集い、浦佐毘沙門堂（南魚沼市）へ参詣する講中がありました。この講中が浦佐から善興寺へ毘沙門天を勧請し、建物も寄進したといわれます（下高柳 阿部榮一郎氏談）。

加茂毘沙門
押合大祭
加茂大昌寺に安置しある毘沙門天は
毘沙門堂であるとて有名であるが
此の祭禮、祭は毎年三月三日に
執行され、堂は大新潟その他の經
典が讀誦され正午には大觀音讀經
の供養、夜は山内をゆるがす押合
祭りが行はれるので、加茂新田小
學校一團、一力、新山等から二百
以上の大蠟燭を父兄撤去にけ
新、察比須大黑一と向ひ、メタル
その他各種讀誦の寄進あり夜と
も非常の賑はひを呈され大昌寺
世話人は目下大祭準備に忙殺さる

▲ 大昌寺の毘沙門大祭を報ずる記事（『新潟新聞』昭和12.2.27）

善興寺の祭礼も三月三日で、裸押し合いがありました。昭和十年頃に中断しましたが、四十四年から居合道の奉納が行われ、庫裡の二階まで見物人で溢れたといい、現在も続いています。

勇壮な裸押し合いの執行は、青年層の娯楽という側面がありました。彼らは盆踊りや神楽など地域芸能の担い手でもありましたが、戦後青年会組織は衰退し、伝統行事も岐路を迎えていきました。

（松坂町　川崎裕也）